

研究室、入江研究室、泉津研究室、清水研究室、高倉研究室、田辺研究室（環境生態学科）の大学院生によるポスター発表があった。

人事異動に関しては、2017年度末で増田佳昭先生が定年退職され名誉教授になられた。平山琢二先生は、石川県立大学に転出された。長年、圃場の管理でお世話になってきた技師の芝原勉さん、井上肇さんが退職された（井上さんは次年度も再雇用になった）。生物実験でお世話になった実験助手の關真千子さんが退職された。事務手続きでいろいろとお世話になった学部長控室の須戸郁生さんは学生・就職支援課に異動された。ここにお世話になった皆様に感謝の意を表したい。

## 環境科学研究科

### 環境動態学専攻のこの1年

**西田 隆義**

環境動態学専攻長

環境動態学専攻では、年度末をもって平山琢二准教授が異動されました。新たな職場での活躍を期待しています。

2017年度は、年度はじめの段階でM1が20名、M2が20名、博士後期課程が10名でスタートしました。M2では17名が修士論文を仕上げ、課程を修了し、社会人として活躍あるいは引き続き博士後期課程で研究を深めることとなりました。博士後期課程では、SONG PEIXUE君と高柳春希君が博士号を得ました。また、松井敏彦さんが長年の研究成果をまとめられ博士号（論文博士）を取得されました。博士論文の内容については学位論文の概要をごらんください。

大学での研究をめぐる状況には相変わらず厳しいものがありますが、社会の経済状況がやや改善したせいで院生の就職状況には明るい兆しが感じられるようになりました。このことは素直に喜びたいと思います。

今年度から正式な講義科目となった環境研究倫理特論では、外部講師もお呼びして研究をめぐるハラスメント、統計解析の考え方、知的財産権、研究不正、ニセ科学など多面的な講義が行われ、学外からの参加者も交え、院生とともに学ぶよい機会となりました。環境科学では、自然と人間の関わりが焦点となるために、科学的な事実関係とともに何等かの価値観が関わるのが必然です。そ

のような場合に、いかに事実を大切にするかは教員・院生を含め研究者にとって死活的であり、不断に考え続けることが必要だと改めて感じました。講義科目化に尽力された先生に感謝します。

### 環境計画学専攻のこの1年

**高橋 卓也**

環境計画学専攻長

在籍学生数（2017年5月1日現在）は、地域環境経営研究部門では、博士前期課程6名（M1が3名、M2以上が3名）、博士後期課程1名であり、環境意匠研究部門では、博士前期課程25名（M1が14名、M2以上が11名）、博士後期課程4名である。例年のことながら、地域環境経営研究部門の受験生増が課題である。博士前期課程の修了者は、地域環境経営研究部門が2名、環境意匠研究部門が9名であった。

本冊子の末尾（修士論文リスト）に修了者の作成した修士論文の題目が掲載されている。日本・世界の都市、農山村、湖沼の現場に即した研究から、建築作品を対象とした研究まで幅広い。

ところで、大学院における教育・研究にはどのような意味があるのだろうか。2016年にカナダ・ブリティッシュコロンビア大学学長となったサンタ・J・オノ（医学者）は、就任演説で以下のように述べている。

「大学は現代社会の基盤である知識全体の貯蔵庫です。大学は未来社会の基盤となる新たな考え方と価値観の源です。大学は真実、そして文化の守護者です。大学は未来のリーダーの養成所です。大学は批判的な探究と議論の場であり（そして将来も永遠にそうあるべきで）、ここから未来社会の価値観が生まれます。大学以上に未来の世界に影響を及ぼす機関はありえないでしょう。」

「未来社会の基盤となる新たな考え方と価値観」「未来社会の価値観」というところに注目したい。「価値観」とは、何が大切であるか、何が良きものであるかを定める基準である。SDGs（持続可能な開発目標）が日本でも多くの人の口にのぼり、さまざまな企業、機関の方針に取り入れられつつある。滋賀県においても同様である。SDGsも価値観（またはその表現）と言えるだろう。ただし、SDGsは2030年に向けた目標である。多くの大学